

公益社団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2015年度 前期 在宅医療助成完了報告書

<テーマ>

地域住民向け 在宅医療プロモーションビデオの制作

<申請者>

原龍馬 (全国在宅医療医歯薬連合会 副代表世話人)

<連絡責任者>

大石善也 (全国在宅医療医歯薬連合会 事務局世話人)

<提出年月日>

2015年11月5日

<研究の背景と目的>

連携という言葉は、かなり以前から「地域医療に必要な要素」として使われているが、高齢社会に突入している現在においても、一部の地域の有志医療・介護者間で実践されている「古くて新しい言葉」である。

この「連携や在宅医療」が広く普及していない理由は、時代の流れと共に医療が細分化され臓器別専門医療に進化した背景も否めないが、実際に各職能団体の医療者間においても「地域を医療の場とする新たな医療形態」という多職種協働で進める在宅医療の内容（連携の雰囲気や利点）すら、まだ知らない医療者も多い。

同様に地域住民においても、医療が必要となった時に医師に依頼する従来の「往診」と、現在、国が進めている定期的に地域を訪問する「訪問診療」というサービスの相違（療養生活を支える医療）を理解している方は少ない。

そこで、地域住民向けに「短時間で分かり易い在宅医療のビデオ」が手軽に閲覧できれば、在宅医療の普及・推進のイニシエーションになるのではないかと考えた。

2030年には、高齢者が日本の人口の1/3を占めるという世界のいかなる国も経験したことがない超高齢化社会が訪れ、1年で100万人もの人口が減少する国になると推測されている日本において、喫緊の課題は、市民がこの新たな医療形態を正しく理解して、「地域住民から求められるサービスという概念」を認識づけることである。

特に、地域住民の目線で「家族の誰かが介護になった場合」に起こりうる問題点と対応できるサービスが一目で理解できれば、在宅医療の優位性と多職種連携が理解でき、より在宅医療が推進されると考えられる。

今回、在宅医療・多職種連携の理解を深めるための「地域住民向け在宅医療プロモーションビデオ」の媒体を制作し、在宅医療の国民的認知度を向上することを目的として作成

した。

<研究の計画・方法>

本プロモーションビデオは、以下4つの構成（ねらい）から構成されている。

① オープニング

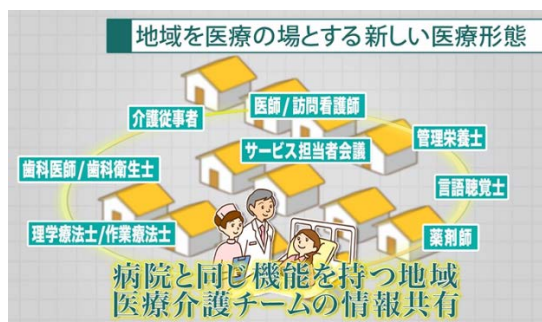


- 2025年・2030年の高齢社会は、現実的な問題であり、そのためには住民が地域を作る（自助・互助）という事が重要であることを意識づける。
- さらに、地域が病院と同じ機能を持つ、新たな医療形態から豊かさを実感できる超高齢社会の創造をイメージで演出し、社会問題として視聴者を注目させる。

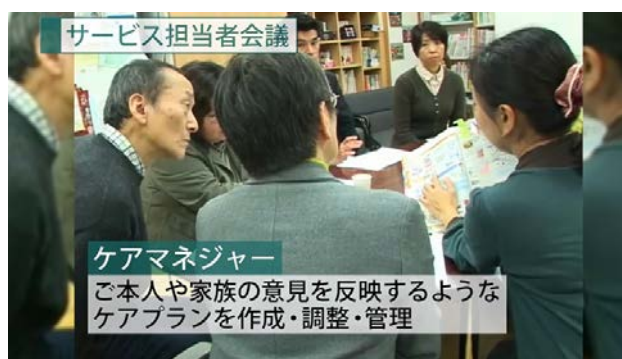
② イントロダクション



- ご家族のだれかが、また本人に介護が必要となった場合の問題点を提議している。
- 高齢者でも聞き取りやすいナレーション周波数の音声調整を行っている。
- 従来の往診と新しい医療形態である「定期訪問診療」との相違点が変わり「主役が本人」であることを広く認識づける
- 地域で在宅医療に関わる医師・歯科医師・薬剤師・多職種が、どのような役割とサービスを提供してくれるかのメニュー項目の説明を行う
- 残された人生を自分らしく生きるための、問題解決のひとつの提案を示している。



③ 本編

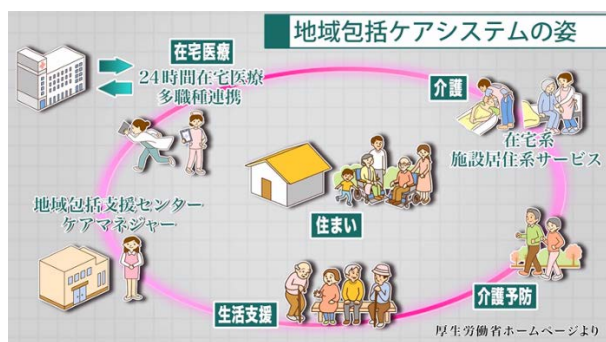


- ・ 在宅医療・ケアの理念とメニューが動画で一覧できる
- ・ 要素となる「24時間訪問診療・多職種連携」が理解でき「地域住民主体の考え方」という在宅医療の基本理念と地域を医療の場とする新たな在宅医療が理解できる。
- ・ 老夫婦が「在宅療養の道」を選択し、在宅医療・多職種ケアをとおして納得した人生を終え、死別の後も「心はそばにいるよ」という「グリーフケアを連想させるテーマソング」を挿入している。

④ エンディング



- ・ 2025・2030年問題に対して、若い世代からも「地域包括ケア」について理解を促している。
- ・ 認知症の急増に対して社会問題へのアピールを示している。
- ・ 豊かさを実感できる幸せな高齢社会の創造を、各世代間の社会全体としての問題であることを意識づける



<添付資料 プロモーションビデオ 参照>